

震災地の現状について（宮城教育大学 岡先生、4月18日）

政府も、被災地の復興に併せ、各地域を居住地と農地・漁業関係に分けた「食糧基地構想」を提案するようですので、新たな発想に基づく地域設計が可能であると思われます。

被災地は塩竈から北と仙台・多賀城から南とで、第一次産業の構成が全く違います。塩竈から北は、いわゆるリアス式海岸で、これまで気仙沼・塩竈などの大きな漁港と多数の小漁港がありましたが、今後は岩手県・宮城県の4・5個の漁港を拠点として、整備を進めていくものと思われます。海岸地帯に水田が広がっていたのは仙台から福島・浜通りにかけての地域で、この地域は内陸に住宅・店舗を、海岸近くに水田、その境目に特産物のイチゴや野菜地帯（面積はそれほど広くない）を設ける方向になりそうです。その際、これまで小規模かつ分散していたビニールハウスや水田をまとめ、大規模で効率よい耕地設計を目指すこととなります。農学や情報分野の研究成果を活かすのは、この部分であると思います。

ちなみに、全国版のTVニュースでは復興話が多いと想像されますが、被害を受けた農地はほとんど手がつけられていない状況です。写真は、4月16日に一部利用可能となった仙台空港に行く途中に撮影したのですが、まだ水田のあちらこちらに車が放置されている状況でした。農地の津波被害の対応は塩害対処が主であるかと思っておりましたが、まずはがれき処理が大問題です。津波の被害を受けた水田のほとんどが、今年の田植えは難しいでしょう。

